



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hovukai.org/>

発行:2013年3月15日
発行責任者: 鵬友会
特定医療法人社団 事務局長 池島 守

病院機能評価を受審して

～認定証交付はスタートライン～

横浜ほうゆう病院 看護部長 渡辺 真利子



白梅が満開になりウグイスならぬメジロが飛来し、枝から枝に忙しく飛び交っています。樽池の水も温んで金魚が顔を出し、日一日と春めいているこの頃を実感しています。

さて、横浜ほうゆう病院では昨年12月に病院機能評価を受審しました。中間的結果報告では、改善等の課題となる項目は『該当無し』でしたので、半信半疑の気持ちで正式結果を待ちました。3月に入り日本医療機能評価機構から『認定証を交付する』という書類が届き、1回でパスしたことに驚きと喜びと今までのスタッフの並みならぬ努力や協力を振り返り、嬉しさを噛み締めています。

鵬友会では湘南泉病院がすでに病院機能評価を受審し認定されています。それに追いつけとばかり、横浜ほうゆう病院の病院機能評価受審構想は数年前からありました。しかし、外来棟の改装やディケアの移転、3.11などの自然災害による影響などがあり、改めて着手したのは平成24年になってからでした。全体的に組織を再編成し、受審までの行動計画を立案、項目別の評価方法の共有などを行いました。

看護部ではもともとあったマニュアルを見直し系統的な整理を行い、看護管理基準、看護業務基準、看護業務手順、褥瘡対策マニュアル、精神科特有の行動制限最小化マニュアルを再編成しました。それぞれの内容には、実践場面で日常的に行っている認知症看護を具体的な言葉で可視化できるように留意し、認知症特有の中核症状・周辺症状別看護、認知症看護過程展開モデル、認知症の健康段階や終末期の考え方、認知症患者の家族看護なども整理しました。その過程では科長をはじめ担当者とも幾度も話し合い、時には喧々囂々のこともありましたが、積極

的な意見交換や協力に支えられてここまでできました。その結果、サーベヤーから、『あるだけのマニュアルはよくみるが、使えるマニュアルですね』といわれたことはこの上ない喜びでした。また、認知症患者の家族講座も開催し、認知症に特化し地域に開かれた横浜ほうゆう病院という役割の明瞭化も図りました。横浜ほうゆう病院では診療報酬上の特徴でもありますが、病棟やディケアに作業療法士や精神保健福祉士が配置され看護部要員としてチーム連携を担っています。これらの実践や地域医療連携室との連携などを確認され、患者・家族を中心にした医療が行われていると言っていただきました。

全体としては、臨床倫理の明確化やクリニカルインディケーター（臨床指標）、適正化委員会などにも取り組みました。医療安全管理についても専従者によるマニュアルの整備、適時追加・修正の実態を確認されました。サーベヤーからは、初回受審とは思えない、解説をよく理解して取組んでいますねと褒めて頂きました。そして、評価の小項目 a b c 3段階評価では、a 評価は89.6%、b 評価は10.4%という結果になりました。

振り返ればあっという間の日々でした。苦しいこともありましたが、しかし、医局、看護部はもちろん、事務部長をはじめ総務、医事課、薬局、栄養科、検査・放射線科スタッフ全員の協力と努力の結果です。改めて、院長・副院長・事務部長・看護部長の親密な連携プレーの大切さも実感しました。しかしまた、継続・発展という課題を戴いたことにもなり、いつまでも喜んではいられません。病院機能評価とは何かといった本来の意義を考えつつ、次のバージョンアップに向かっていきたいと思っています。

第20回 市民講座 開催！

平成25年3月8日(金)
新中川病院 リハビリ室

3月8日(金)17:30から、第20回市民向け医療・福祉講座『あなたらしく生きるとは』を開催しました。福田院長の基調講演をはじめ、新中川病院の職員3名が、「自分の人生、命を全うする」ことをテーマに、事例を挙げて感じたこと思い悩んだことなどを発表させて頂きました。当日は約140名もの方々にご参加して頂き、会場は熱気に包まれ大盛況となりました。



◆基調講演『生ききるために』◆



【新中川病院
福田 院長】

福田院長は講演の中で、家族に会えなくなることや、治療を続けたが改善せず、経済的な負担からといった理由で、積極的な治療をやめ最小限の薬のみで、その後の人生を生きる決断をした3名の事例を紹介。結果的に、治療を行っていた時よりも病状が安定したことを述べると、「くよくよせず、前向きな覚悟を持ち、入院前と同じ日々の暮らしを送っている」と3人の共通点を挙げ、「皆が助かる訳ではないが、それでもそんな気持ちの持ち方が人間を豊かにしているのだと思う」と述べました。そして「このような自分の生き方を通す方を支えることが、我々医者役目である」と強調し、「高齢者の体に合わせて辛さや苦痛を取り除くこと。それだけで患者は命を全うできる」と終末期医療の在り方を述べ、同時に、死と向き合うことの大切さを訴えました。

【会場風景】

◆パネルディスカッション◆

一人目の今成科長は、母親と二人暮らしの22歳の患者の事例を紹介。入院当初、使わないとしていた人工呼吸器を使う決断をした経緯について、母親の心境の変化、職員の葛藤を交えながら説明。「人工呼吸器を使い、容体が安定したことで、母親も働きだし、先を見つめるようになった」と母親の変化にふれ、「この患者さんは若いが、今まさに生ききる過程を生ききっていると思う」と述べました。



二人目の吉田係長は、50代のALS（筋委縮性側索硬化症）患者の事例を紹介。話すことができず、文字盤を使用しての会話に悪戦苦闘しながらも、「最期の自分の意思をまばたきで伝えてくれた」と当時の状況を話し、「最期、駆け付けた別れて暮らしていた家族の顔を見て、母親の顔になっていた」と述べ、「実際に本人から聞くことは出来なかったが、頑張って生ききれたのではないかと述べました。



最後は広瀬所長。在宅で看取った60代のがん患者の事例を挙げ、家族側の心の変化について述べました。「夫が妻の病気を受け入れられず、関係がギクシャクしていた」とする当初の状況から、その時期に、「入院したら会いに行けない」と在宅での看取りを決意するに望み、家族の心情にふれ、「余命を告げられれば本人は当然、家族も辛い。告知があって精神的な葛藤を経て受け止めるまでの過程は、本人とまったく同じ」とし、「あなたらしさというのは、自分がどうしたいかという思いを理解し、納得した上で行動するところにある」と述べました。



【ほうゆう訪問看護ステーション 広瀬 所長】

『知的障がい者医療支援について』

H25.2.25(月) 新中川病院 院内研修

新中川病院で障がい者医療支援に取り組んでいる高木医師は講義の中で、実際に受け取った手紙を紹介。そこには、障がいを持つ患者が、病院とコミュニケーションがとれず、病気を発見することができないまま亡くなるまでの経緯が綴られており、知的障がい者がおかれている医療現場の厳しい状況を目の当たりにするものでした。高木医師は、新中川病院の障がい者への取り組みを説明し、「病院全体で障がい者への医療支援に取り組んでいる病院はまだ少ない。当院がそのモデルとなればよい」と思いを述べました。

◇新中川病院の知的障がい者医療支援◇

【診療科目】内科(15歳以上) / 【診察日】火・金の午前中

病院が苦手な方、コミュニケーションが難しい方は、総合相談室までご相談下さい。一人ひとりの状況に合わせて、スムーズに受診できる方法を一緒に考えましょう。

【総合相談室 直通】045-815-2577
(9:00~17:00 日・祝・年末年始除く)